



火入れ式



早いもので平成29年度(2017年度)も折り返しを迎えます。子供たちにとって、また保護者の皆様にとってどのような上半期だったでしょうか。

さて、10月は修学旅行をはじめ、大きな学校行事がたくさんあります。中でも火入れ式は、六甲山小学校らしいとても大切な行事の一つです。

六甲山小学校は、標高795メートルに建っています。標高が100メートル上昇するごとに約0.6度、気温が低くなると言われていますので、神戸市街と比べるとおよそ5度は気温が低いという計算になります。

そこで朝夕がめっきり肌寒くなると言われている二十四節気の霜降の日(今年は、10月23日)に石造りの薪ストーブに火を入れ、来るべき冬の寒さに備えるための儀式を行います。これが火入れ式です。

火入れ式で点火するときに使用する「火」ですが、とても手間のかかる方法で「火」を手に入れます。5・6年生が、初めて火おこしに挑戦する4年生とチームを組み「まいぎり式火おこし器」を使い、火をおこすのです。この「まいぎり式火おこし器」というのは、固定した木の板の上で垂直に立てた木の軸を回転させることにより、木と木の摩擦熱によって火をおこす道具です。

見学する園児と1年生から3年生の熱い視線の下、苦勞の末得られた「火種」を玄関ホールにある石造りの薪ストーブに点火するのです。

これほどまでに苦勞するのは、それもそのはず、木材の発火点は400~470℃も達します。子供たちが木と木をこすり合わせる摩擦熱でこの温度を作り出そうというわけですから、大変な労力が必要なわけです。マッチやライターが無かった先人の苦勞を味わい、火のありがたみを身をもって体感するにはとても貴重な経験となります。何よりも、災害等でライフラインが途絶した状況下で火を手に入れる術を知っていることは、生き抜く上でとても大切なことかもしれません。

さて古来より「火」は、人間が生活を営む上で欠かすことのできない大切なものでした。電気が無かった古の人々は、太陽がとっぷりと暮れた漆黒の闇に浮かび上がる温かく、そしてほの明るい炎を見て何を思ったのでしょうか。

古代ギリシャの哲学者エンペドクレスは、この世界の物質は、火と空気と水と土の4つから構成されると考えました。古来より「火」は特別な、そして万物の根源的な特別な「もの」として捉えられていたのです。

燃焼とは、光と熱を伴う酸化反応ですが、その原理が分かるまでは、不思議な、実態の分からない「もの」としてとらえられていたのでしょう。

今年度も地域・保護者の方もお招きして、冬の訪れを告げる火おこしや火入れ式の様子を見ていただく予定にしています。是非子供たちの頑張りに対して温かい応援をよろしくお願い致します。

今年もまもなく、冬がやってきます。登校後、薪ストーブから放射される熱に手をかざして「火」の光と熱を「やる気エネルギー」に変換して元気に教室に上がってほしいものです。

いよいよ運動会が近づいて参りました。子供たちが気持ちを合わせて頑張ります。温かいご声援をよろしくお願い致します

今年もストーブに使う薪として、六甲山上の事業所や六甲山を活用する会より廃材や伐採材をいただいております。ありがとうございました。

森澤 克行